

今後の梁啓超研究の前提となる一冊

狭間直樹著

岩波現代全書87

梁啓超 東アジア文明史の転換



森川 裕貫

四六判 224頁
岩波書店
[本体2000円+税]

改革開放を経て今日の世界に大きな位置を占める中国において、いまなお用いられている概念や語彙の多くは中国近代

に確立したものである。そして、その創出にもっとも力を尽くした一人が梁啓超であったことは、疑いを容れない。本書

『梁啓超 東アジア文明史の転換』の帯には、「改革開放の元祖」とある。「元祖」であるかどうかについては議論の余地があるだろうが、梁啓超が改革開放の基盤の一端を担っているのは確かであろう（なお、この文言は、著者ではなく出版社が附したとのことである。広く注目を集めるといふ点では、効果的であるかもしれない）。

梁啓超がこうした貢献をなすのに決定的に重要であったのが、一八九八年から一〇年以上にわたり強いられられた日本の亡命生活であった。本書はこの亡命時代に焦点を当てて叙述

を進めている。

第一章「亡命——「思想一変」」では、一八九八年から一九〇一年にかけて刊行された『清議報』の運営が論じられる。特に力を入れて解説されるのが、『清議報』において「国家論」として翻訳・連載されたブルンチュリの国家学説紹介である。この「国家論」が、吾妻兵治によるブルンチュリの訳書『国家論』を流用したものであることは、著者も述べるように、すでにマリアンヌ・バスチドにより指摘されていたが、著者は吾妻訳本の出版元である善隣訳書館と中国の関係などを調査し、これまでの知見を大きく拡充した。

第二章「思想——国家主義」で注目されるのは、戊戌政変で命を落とした盟友、譚嗣同との関係についての考察である。譚嗣同の名著『仁学』の『清議報』掲載版と単行本版、およ

びそれぞれに附された梁啓超の手になる「譚嗣同伝」などを手がかりに、先行する『清議報』版が康有為の弟子としての譚嗣同像を喧伝しようとしたのに対し、単行本版が康有為と譚嗣同の関係を切断する意図を有していたことを解明した。

第三章「精神——「中国之新民」」では、一九〇二年から一九〇七年にかけて刊行された『新民叢報』、とりわけ梁啓超の名を一躍高めた「新民説」についての詳細が論じられる。四年もかけて書き継がれた「新民説」の論旨が、中途のアメリカ訪問を契機に大きく変化した事実はよく知られており、著者によるものも含めて複数の議論や解釈がなされてきたところであるが、ここでは著者の見解が改めて整理・提示されている。

第四章「行動——代作・論戦・運動」で目を引くのは、清朝政府の憲政視察団と梁啓超の関わりについてである。一九〇五年から一九〇六年にかけて、清朝政府は憲政視察団を欧米と日本に派遣する。視察団は一定の成果を吸収したとはいえ、短期間の滞在で最新の政治思想を踏まえた視察報告を書くことは困難であった。そこで、豊かな知見を有する梁啓超に秘密裏に代作が依頼される。梁啓超はこれを引き受け、清朝統治下で推進すべき立憲政治の詳細を書き上げた。梁啓超の力作を参照して清朝政府は上諭を發布し、官制改革を進

めたが、それははなはだ不十分だったこともあり、清朝は倒壊を迎えた。

あとがきによると、著者は一九五〇年代の終わりに研究生活を開始したが、その主要な関心は人民革命闘争史にあり、梁啓超を研究し始めたのは一九九三年とのことである。とはいえ、『共同研究 梁啓超』（みすず書房、一九九九年）に結実したその研究成果は、ただちに注目を集め、二〇〇一年には社会科学文献出版社より中国語版が出版されて、国外の研究者を大いに刺激した。また、著者が中心的に参画した『梁啓超年譜長編』翻訳事業は、二〇〇四年に全五冊にまとめられて岩波書店より刊行されたが、その優れた訳文のみならず、詳細な訳注が高く評価されており、中国の研究者でわざわざ日本語版を買い求める方もおられるほどである。このほか、著者個人による梁啓超についての研究論文が、日本語と中国語により複数発表されており、やはり国内外の研究者に知的刺激を与えてきた。本書の内容は、それら個別論文ですでに論じられていることも多いのだが、このたび一冊の書物としてまとめられたことは著者の研究の一つの総括として意義が大きく、また読者を裨益するところ大である。

梁啓超研究の第一人者の手になる本書であるだけに、優れた点・教えられる点は数多いが、ここではそのなかから二点

のみ挙げておきたい。

第一に、日本における清国留学生の総数や梁啓超の関係した雑誌の発行部数など、本書は多くの数値を挙げて、読者に梁の生きた時代についての具体的なイメージを抱かせるようにしている。本書のような個人の思想に焦点を当てる著作では、数値は軽視されがちであるが、著者はこうした傾向とは距離を置く。そして信頼できる数値を挙げようとすれば、叙述は数値のレベルにとどまらず、周辺の事情にも自ずと周到に目を配ることとなる。そのことによって、本書の叙述は単なる思想の解説を越えた充実したものとなっている。

第二に、譚嗣同評価を手がかりとした、梁啓超と康有為の關係の詳細な分析である。著者は各種のテキストを丹念に分析し、梁啓超と康有為の間の師弟を超えた複雑な緊張關係を

丁寧に描き出している。当たり前の手続きといえどもそれまで

だが、しかしその当たり前の実践がはなはだ困難なのであつて、著者の披露する手際の巧みさは熟読に値する。なお、複雑さをはらむ梁啓超と康有為の關係は、近年の中国の優れた研究も注目する重要論点であり、さらなる議論の深まりも期待できよう（たとえば次のような研究がある。桑兵「康梁並称的縁起与流变」『近代史研究』二〇一三年第二期。夏曉虹「新広東」『從政治到文学』『學術月刊』第四八卷第二期、二〇一六年二月）。

このほか留意に値するのが、著者の梁啓超に対する評価である。好きか嫌いかと問われれば、著者はおそらくかなり梁啓超が好きなのであろうということが、本書の叙述の端々からにじみ出ている。そのことがはつきりとわかるのが、一九一一年の武昌蜂起に直面した梁啓超に対する評価で

現代中国語の重ね型

— 認知言語学的アプローチ —

張恒悦著 現代中国語の11種類の重ね型を取り上げ、それぞれの意味機能及び形式的に似通った重ね型相互間における意味的差異について、認知言語学的立場から考察。重ね型という言語現象が中国語文法体系の中で果たす役割を系統的に解明。
■ 4762円

法治社会における基本的人権 — 発展権の法的制度研究

汪習根著 第三世代の人権として提唱される「発展権」の歴史的起源、基本的内包、法理的基礎、憲法規範、法的保障と司呂衛清訳 法救済の原理と具体的方式を含む基本的理論および現実的な法的保障を探る。
■ 3200円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

ある。このとき梁啓超は、それまで掲げてきた立憲君主制に固執するものではないとの新しい立場を示したが、この点について著者は、「時流に遅れることなく、むしろそれに対応できているところは流石である」（本書、一九三頁）と述べている。梁啓超に対して、相当に好意的な評価を著者が下していることが伝わってくる一文である。ただし、これは論争的な評価でもある。梁啓超はその存命中もその死後も、時流に応じて自らの主張や思想を変化させる人物であると見られており、そのことは無節操・無定見であるとしてしばしば批判の的になったからである。

著者の好意的評価を説得的なものとするためには、同時代そして後世に梁啓超に対して向けられた様々な批判を丁寧に見ていく必要がある。そしてそのためには、本書ではほとんど触れられなかった中華民国時代の梁啓超についても検討を深めていく必要があるだろう。よく知られているように、梁啓超は過去の自分の営為を振り返り論じる文章を一再ならず記しており、それはときに自己批判ともなっているからである（その代表的著述の一つである『清代學術概論』（一九二一年）には、本書も触れている）。

以上の点は、本書で掘り下げられているわけではないが、しかし幅広い視野から梁啓超研究に取り組んできた著者であ

るから、その注意はこうした問題にも当然向いているのではないかと推測される。この点に関する著者の具体的知見が、いずれまとまったかたちで披露されるよう、強く待望するところである。

ただし、本書一冊でも十分に優れた内容を備えている点は改めて強調しておきたい。直接にせよ間接にせよ、今後梁啓超を論じるのであれば本書を必ず参照することが求められる。また現在、梁啓超にそれほど関心がない方であっても、本書から得られる収穫は少なくないだろう。

（もりかわ・ひろき 京都大学）